

書簡型連載 6

ケアマネさんとお坊さん



木村 晃子 様



差出人 竹中 尚文

2017年11月16日

— 亡き父 —

もう三ヶ月のご無沙汰になります。木村さんはお元気でしょうか？ 天気予報で北海道に降雪が予報される日が出てきました。早いものです、もう冬の訪れです。私は、スポーツも食べ物も楽しめる冬も好きなのですが、こここのところ毎年、ひどい風邪に悩まされるので、不得意な季節となっています。風邪さえ引かなければと思うのですが、体力の衰えでしょうか、健康管理に意識の足りなさでしょうか、どうも風邪を引いて寝込んでしまって仕事が滞って、周囲の人たちにずいぶんと迷惑をかけています。

先月で、木村さんのお父様が亡くなられて二年になりますね。どんな時間の経過があったのでしょうか。私は、この冬で父を送って十三年になります。共に命があった時代、亡くなって直後の時代、死後数年の時代、十年を越した今と、いろんな父親のイメージがあります。

私の場合は、生前の父親とは折り合いのいい関係ではありませんでした。本当によく衝突しました。全く生きる価値観が違った人でした。父親は、衣類にお金を掛ける人でした。自分が他人からどのように見えているかを気にしていました。手厚く遇されるのが好きでしたから、服装にはかなりの費用を使っていたようです。私は、ファッションに費用を掛けないようにしています。何でもいいのではなく、厚遇を受けるのが苦手なのです。特別扱いをされると何か思惑がある

のか疑ってしまう悪い癖があります。

父は寺の住職でありました。私はその寺を継いだのですから同じポジションにあります。父は、お寺の権威を第一にして、その寺の住職の権威を大切にしました。私は、若い頃からそうした権威主義が嫌で、よく父親と衝突しました。今考えると、父はお寺の権威をないがしろにしようとする私を許せなかったのでしょう。当時の私は、お寺の権威が人々の大切な思いの集約であるとは思えませんでした。父親と私は方向性に対する理解が、逆だったように思います。お寺の力が個々の人に向かっていくこと、すなわちお寺の力から人々への矢印というのかベクトルのようなものでしょう。お寺の力が人々の心を変えていくことかもしれません。一方、人々の心が集約してお寺が成り立っていくこと、すなわち人々からお寺へのベクトルです。時代も違うと思います。理解の仕方も変わってきたのでしょう。

父親の死後数年間は父親のことをよく思い出しました。生前に思いもしなかった父親の思いにもいくつか出会えました。たとえば、私が大学に進学するので実家を離れる時の父親の顔を父の死後に初めて思い出しました。とても心配した目で私を見送ってくれたのを、思い出しました。「心配してくれたんだ・・・」と思いました。死んでから思い出したって無意味じゃないかと思う人もいるでしょう。私はそれでいいと思います。私は死によって関係性が切れるとは思っていないのです。

私にとって家族の歴史で大きな出来事だったのが、私が十四歳の時だったと思います。中学二年生の終わりか三年生の始まり頃だったと思います。原因は何か覚えていませんが、両親が夫婦げんかをして母親が家を出て行きました。その時にはいつもと違う事態になったと思いました。直ぐに母親は東京で暮らす弟の所に行ったことが分かりました。父親は、私に三歳年下の弟と母親を迎えに行くようにいいました。私は、弟と一緒に叔父の家を訪ねました。夫婦げんかの理由も経過も知らない私は、ただ帰ってきてくれというしかありませんでした。母親は、帰らないと答えました。そして、東京駅まで私たち兄弟を見送ってくれました。新幹線が発車するとき、私の隣の席で小学生の弟は泣き出しました。その

時、私は親を頼りにしないで生きていこうと決心しました。少年の決心ではありましたが、あの時が私のターニングポイントでした。

家に帰って、父親に迎えに行きたければ自分で行けばいいと言ったように思います。両親が離婚するなら、それは仕方がないと思えました。叔父のアパートに身を寄せて職探しをしていない母親は、本気で離婚するつもりはないと思いましたし、それを迎えに行くのは私の役割ではないと思いました。数日後に、父は母を連れて帰ってきて、我が家は何事もなかったかのように暮らしました。

この出来事は、私の成長に於いてはとても大きな出来事だったと思っています。今、父親は母親をどのように見ていたのだからかと思います。当時、父親は寺の住職をしながら定時制高校の教員もしていました。その後、もう無理だと言って四十八歳で教員を早期退職しました。母親は、結婚してから一度も外で働くことはありませんでした。また、いくらお寺が忙しくても母親がお参りに行くなんで、あり得ないことでした。父親は、家庭に居る妻を求めたのでしょうかし、母親もその役回りを当然のことと受け入れていたのでしょうか。私にはそうした夫婦関係を理解しがたいものでした。当時はそうした夫婦関係が珍しくなかったし、父親にも母親にも、受け入れやすい関係であったと思います。

私は、かつて父親が住職であった寺の住職をしています。しかし、私にとって妻はあくまでパートナーです。共にお寺の将来像を描きながら、共に仕事をしていくのです。彼女も日々のお参りに行きますし、彼女なしには今のお寺は成り立ちません。それが私たちの生き方でもあります。

今、私の父親は「時代も変わったなあ」と言っているのでしょうか。今年の前月に父の十三回忌を勤めて、父の人生を客観的に眺めているように思います。また、それは記憶の彼方に押しやることではありません。法事を勤めるのは、そんな機会であるように思います。

## 竹中 尚文様

こちらは、すっかり冬になりました。まだ、11月だというのに、とても寒い毎日です。外を歩くときには、転ばないように慎重に歩みを進めているつもりでも、ふとした瞬間に、体が地面と仲良くなっていることがあります。

先日も、暗い駐車場で、アイスバーンになっているのがわからず、大転倒してしまいました。骨折したかと思うほどの痛みでしたが、幸いに骨折には至りませんでした。とは言え、これからの季節は用心です。

この10月10日で、私の父が亡くなって、まる二年が過ぎました。人の体が亡くなるというのは不思議なものです。父はこの世にはいないのですが、いなくなった今の方が、父をより近くに感じます。

私の父は50歳の頃に癌を患い、声が徐々に出なくなりました。60歳を過ぎた頃には、体はすっかり弱り闘病生活です。その頃の私は、3人の子育てに必死でした。父とゆっくりと話をすることもない毎日でした。

父がいない今、父に聞いてみたいことがたくさんあります。竹中さんのお父様が、教員をされていたのと同じく、私の父も高校の教員をしていました。22歳で大学を卒業してから、赴任した学校は2校しかありませんでした。出世することもなく、一介の教師です。父が亡くなってから、母あてに、父にゆかりのあった人たちから、ずいぶんと励ましの手紙が届きました。大学時代の友人であったり、赴任先の同僚の先生であったり、また、晩年の父と共にした、若い先生らからの手紙でした。そのどれにも書かれていたのは、父がどのように人と関係を作ってきたか、ということでした。

父は、いつも生徒のことを第一に考えていました。教師と生徒の関係が上下ではなく、日々の生活者としての対等な人間関係であることを記していた文章を見たことがあります。対等な人間としての良き理解者であろうとしている教師。それが父の教師としての姿勢だったように感じます。このことは、違う職業ではあるけれど、ケアマネジャーとして私が仕事をしていく上で指針にしている一つであることは間違いありません。

先日、この春出会った一人の高齢者とお別れしました。天涯孤独かのようにふるまっていたその人には、離れたところに子どもがいました。数十年も会っていませんでした。その所在もわからないということでした。自身の病状から、余命はそう長くないことは医師に説明を受けていました。私は、その方に生きている間にやり残したことはなかったか、尋ねました。すると、子どもに会いたいと言いました。そこから、子どもの所在を探すことにしました。

春から初夏にかけて、何度も何度も戸籍を取り寄せては、親子の糸を手繰り寄せました。おそらく、ここではないか、という宛先に手紙を送りました。返信を待ちました。手紙が到着したと思われる日から数日だった日、子どもさんから電話がきたと喜んで知らせてくれました。声が聴けたらもういい・・・と言っていました。その後、数十年ぶりの再会を果たしました。生きているうちにやり残したことは、なくなったかのように思われました。

そして、秋になった頃、今度は最期の支度をしたと言いました。自分が亡くなったなら、ひっそりと誰にも迷惑をかけないで、無縁仏にしてほしいと言いました。死後の諸手続きも含め、一切のことを事務的に済ませたいという意向でした。死後事務委任契約、というものがあります。この手続きに向けて進めることになりました。その途中で心に変化が起きたのでしょうか。今まで心を閉ざし、関わりを拒否していた兄弟に、自分の亡き後のことを頼むことができたと話されました。死後事務委任契約の手続きはやめることにしました。長い間会うことのなかった子どもに会うことができ、長い間関係を断っていた兄弟と和解し、「もう、いつ死んでもいい。」と涙ながらに話をされていました。

その数日後、入院となりました。私は、休日にその方の病院へ見舞に行きました。ベッドに横たわったまま、「もう死にたい。痛くて、痛くて、早く死にたい。」と言っていました。生きていくことの大変さを、ベッドのそばで感じました。私が黙っていると、「休みなのに来てくれてありがとう。」と言って、手を伸ばし握手をしました。「また、来ますね。」と言って、病室を後にしましたが、それが最期の別れになりました。

亡くなった後は、その方が託した通り、兄弟が最期の時を送り出してくれまし

た。ご兄弟の方も、すがすがしいお顔をされていました。

春から初冬のこの出会いと別れは、私に様々なことを教えてくれたように思います。何も願ってはいないようで、人の心の憶測には、小さな願いがあるように思います。その小さな願いを叶えるために、大きな力が湧き出てくるのが、「生きる」ことそのものなのかもしれません。

親子の糸を手繰り寄せる作業をする時、その方は私の昼休みをめぐらして訪ねてくれました。私が忙しく外に出回っているのも、その時間が良いと思ってくれたのでしょう。約束は、だいたい昼休みごろになっていたのも、私は、二人分のおにぎりを作って一緒に食べたことがあります。梅干しのおにぎりです。竹中さんが春に送ってくださった、いかなごのくぎ煮と一緒に食べました。「美味しいね。ありがとう。」と言いながら食べてくれた表情が忘れられません。昼におにぎりを食べながら、生きていくうちにしておきたいことに関わらせていただいたことは貴重な体験です。

私の父が、生徒のことを、同じ生活者として対等な関係、と言っていたことは、このようなことだったのではないかと感じます。年齢が違っても、背負っているものが違っても、人はお腹が空くと思うのです。お腹が空いたもの同士が、一緒におにぎりを食べる。これが生活であり、生きることであるように思うのです。

体が亡くなっても、心はあり続けるものですね。私も、一生懸命生きていこうと思います。時に空腹を感じながら、お腹を満たしながら・・・

では、また、お元気で・・・

木村 晃子